

—目黒のサクラ再生実行計画—

駒場野公園

サクラ再生実行計画



令和3年3月

目黒区

## 目次

1	サクラ再生実行計画の考え方	1
(1)	背景	1
(2)	目的	1
(3)	対象	1
(4)	計画作成の流れ	2
(5)	現地調査会	3
(6)	ニュースレター発行と意見募集	3
2	現状と課題	4
(1)	概況	4
(2)	樹木診断結果	4
(3)	土壌基盤調査結果	5
(4)	現状の問題点の整理	8
(5)	アンケートの調査結果	11
3	将来像の検討	12
(1)	前提条件の整理	12
ア	安全な歩行空間の確保	12
イ	健全な高木育成	12
(2)	植栽計画	12
ア	植栽品種の選定	12
イ	植栽基盤の改善	14
ウ	植栽間隔の確保	15
(3)	将来像	16
4	維持管理計画	20
(1)	既存樹の基本的な維持管理	20
(2)	新植樹の基本的な維持管理	20
(3)	その他周辺植栽の維持管理	20
(4)	病害虫の被害	20
(5)	協働作業の考え方と役割分担	21

# 1 サクラ再生実行計画の考え方

## (1) 背景

桜は日本を代表する花として広く親しまれており、区内にも目黒川や駒場野公園等の桜の名所があり花見時には多くの人で賑わっている。

本計画の対象である駒場野公園は、多くの品種の桜が植えられ、長い期間花を楽しめることが特徴となっている。しかし、開園してから約30年が経過し、桜の老齢化や生育環境の変化から樹勢が低下し、倒木や枝折れが懸念されている。

## (2) 目的

園内にある桜について現状の課題を整理し、桜景観の将来像や保全策について住民と協働で検討を行い、中長期的な視点に立ってサクラ再生実行計画を作成する。

## (3) 対象

駒場野公園 所在地：駒場 2-19-70

開園：昭和61年3月31日 拡張：平成20年1月20日

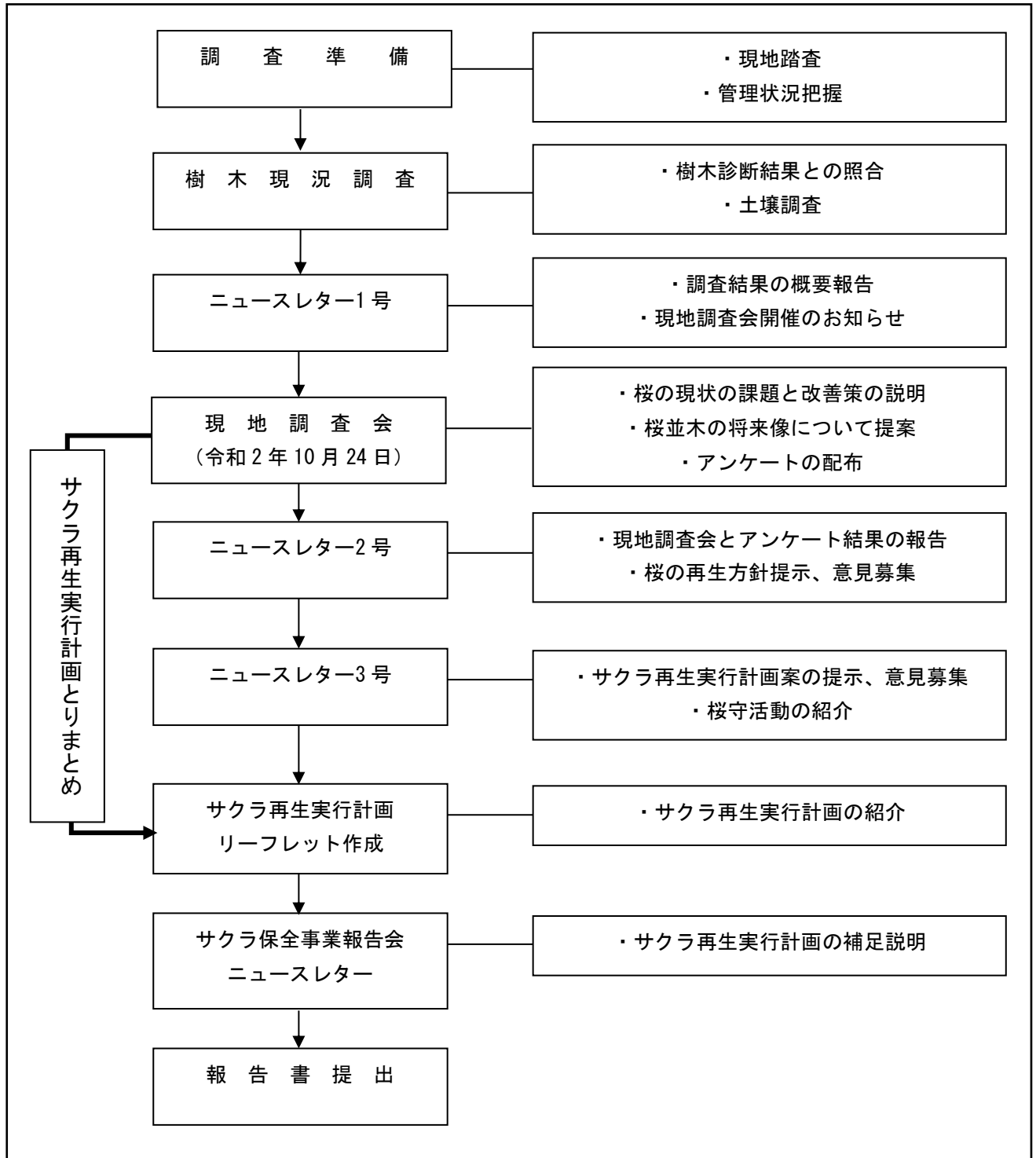
面積：39,025.29m<sup>2</sup>

案内図



#### (4) 計画作成の流れ

サクラ再生実行計画は以下の手順で作成した。(令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会場によるワークショップは中止し、現地調査会とアンケート、ニュースレターへの意見募集により地域住民、ボランティア等の意見を収集した。)





## 2 現状と課題

### (1) 概況

駒場野公園は、旧駒場農学校跡地に武蔵野の豊かな自然と親しむ場として昭和61年3月31日開園した。さらに平成20年1月20日多目的広場を含む拡張部を南側に併設した。約3.9haの広さを誇る里山の環境が残る公園では、地域住民が様々な活動を行い、自然と共生するまちづくりの拠点となっている。また、桜は約60本あり、約20種類の品種が園内各所に植えられ、春と秋の長期間桜の花を楽しむことが公園のアピールポイントにもなっている。

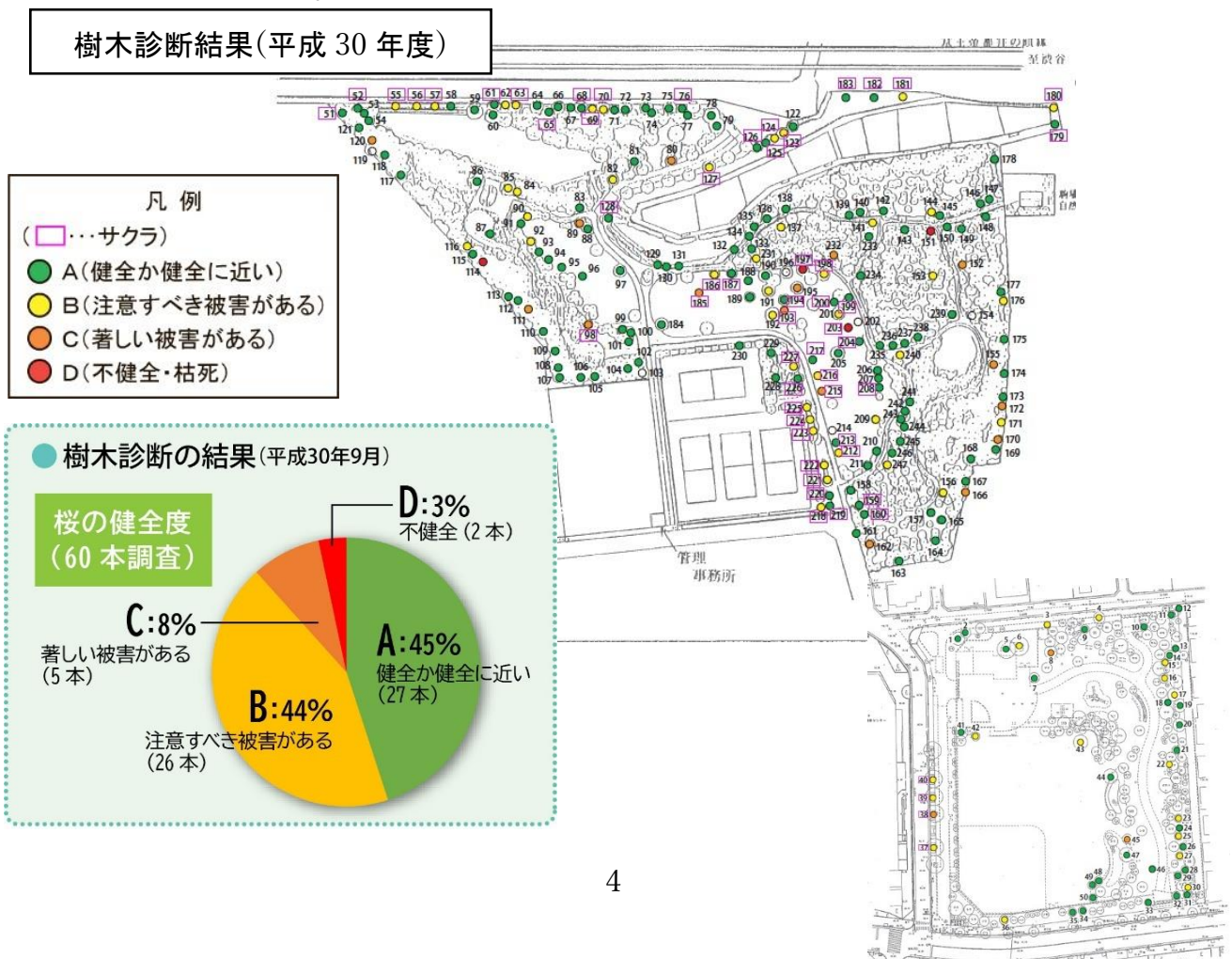
しかし、公園の開園から約30年が経過し、園内の桜は根や幹の空洞化や腐朽菌被害がみられ、樹勢が明らかに衰退傾向のものもある。

また、平成30年度の樹木診断の対象には入っていなかった若木（北門付近のコヒガン）についても、植付後の成長が悪く、腐朽菌に侵されているものもあり、今回の計画を立てる上で、生育環境を改善するために検討対象エリアとして現地を確認した。

### (2) 樹木診断結果

桜の診断は、平成30年9月に幹周90cm以上の大きなもの60本を対象に行われている。うち健全度の判定がA（健全か健全に近い）27本、B（注意すべき被害がある）26本、C（著しい被害がある）5本、D（不健全・枯死）2本で、9割がA・B判定である。

#### 樹木診断結果(平成30年度)



### (3) 土壌基盤調査結果

駒場野公園は、大別すると一般来園者がほとんど立ち入らない樹林地と、恒常的に人が往来・滞留する園路広場の2つのエリアがある。現地を事前踏査したところ樹林地の桜は衰退の主原因が日照不足や他の高木類との競合によるものと考えられる。一方、園路広場エリアは公園利用者等による踏圧により地盤が固められたことが生育不良の要因と考えられることから、土壌基盤調査3か所を実施した。調査方法は長谷川式土壌貫入計を用いて土壌の硬さを調べ、検土杖（もしくは三角ホー）を用いて土を採取分析した。



土壌調査地点



調査地点 No.1 拡張部



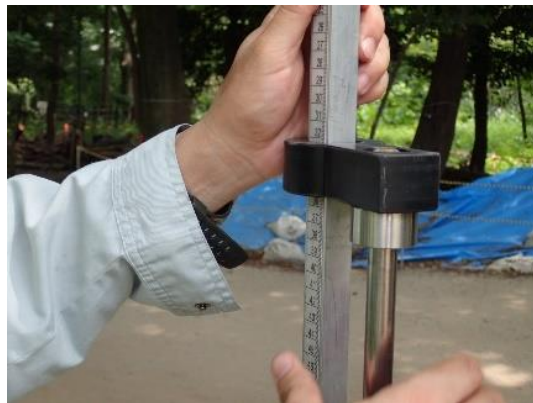
調査地点 No.2 広場



調査地点 No.3 北門並木

#### ア 長谷川式土壌貫入計による土壌軟度の計測

長谷川式土壌貫入計は、おもりを50cmの高さから落下させ、そのエネルギーで先端の円錐コーンが土中に貫入した深さを読み取る。一打撃ごとの貫入深さから土壌の軟らかさを求めることができ、グラフ化することで、調査地点の土壌の深さと軟らかさの関係を分かり易く示すことができる。



長谷川式土壌貫入計  
土壌調査風景

#### イ 検土杖および三角ホーによる土壌採取調査

検土杖は、T字型の金属の杖状で、先端が円筒形になっており、土壌に差し込むことで30cmずつの土壌が採取できる。

採取した土壌は、それぞれの深さの段階で土色や含まれる湿り気、固まり具合や根や腐植や砂利など混合物の有無をチェックし、植物の生育に向いているかどうかの確認をすることができる。なお、土壌が固結して検土杖が入らない場合は、例外的に三角ホーで土壌採取を行う。



長谷川式検土杖  
土壌採取調査風景



三角ホーによる土壌採取



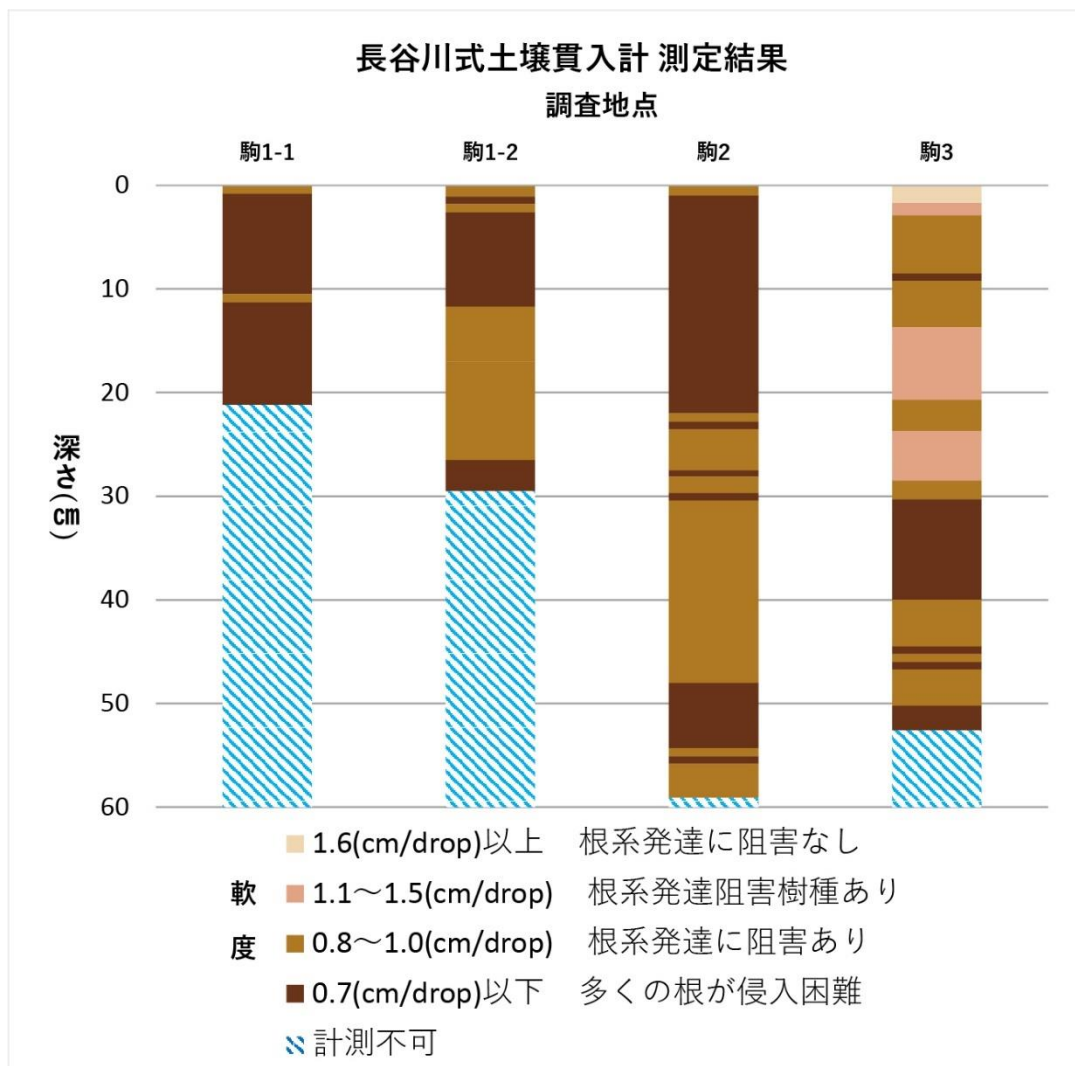
### ウ 駒場野公園の土壌基盤の特徴まとめ

公園拡張部の広場への動線沿いでは、コヒガンザクラの根元から 1m 離れた No. 1-1 は 20cm 以下が測定不能な硬さであった。さらに、根元から 35cm 離れた桜の根鉢付近である No. 1-2 でも、同様に測定不可の硬い土層に突き当たった。

高木の有効土層は、深さ 60cm 以上が目安であるが、これでは高木以外の低木地被類であっても根系を伸ばして水や空気を取り入れることができず健全な育成は望めない。

裸地化した広場の、カスミザクラの根元から 1m 離れで計測を行った No. 2 も表層が固く、深さ 20cm を超えたところで多少柔らかくなっていることから、駒場野公園の園路広場沿い植栽地は、人の踏圧により締め固まってしまう、地表の裸地化や桜他高木類の根の隆起と衰退を招いていると考えられた。

以上のことから、園路広場エリアの桜の土壌は、表層が砂質系で乾燥しやすく硬く固結しやすい土性である。また、地表から 10cm 辺りに細根が出てくるが、量は少なく、深さ 20cm までの間には、根の発達が困難な硬さの土層ができている。



#### (4) 現状の問題点の整理

現在、駒場野公園の桜は場所毎にいくつかの問題を抱えている。健全な桜を再生維持するためには、植栽の土壌基盤、人の利用と桜の生育空間の切り分け、空間に対する適切な品種の選定といった対策を講じる必要がある。

##### ア 北門ケルネル田んぼの上の桜並木

###### (ア) 桜の問題

###### ○樹勢不良

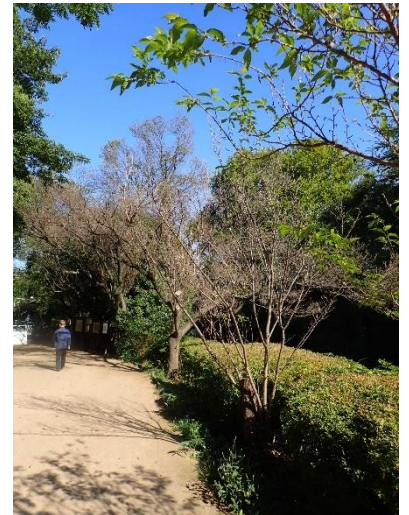
- ・コヒガンザクラが全体的に衰弱している。若い苗木の成長も悪い。

###### ○樹皮の欠損、大枝や幹の空洞

- ・枝先の枯れが進み、強風時に折損した枝の傷口の巻き込み状態が悪い。
- ・さらに腐朽菌による材の腐朽で大枝や幹に空洞ができ、折損のリスクを抱えているものもある。

###### ○病害虫の罹患

- ・ソメイヨシノ、コヒガンザクラともにコスカシバなど穿孔虫の被害やコフキタケやカワウソタケなどの腐朽菌被害を患っている木が多い。



北門のコヒガン並木  
・全体的に衰弱

###### (イ) 土壌の問題

###### ○排水性と保水性

- ・斜面の上に配植され通風と陽当たり、水はけがよい立地にある。
- ・土壌の保水性がやや低く乾燥しやすい。

###### ○狭い根域

- ・地表から 10cm 前後の深さで根系の発達が困難な硬い土層がある。
- ・平坦地は根張りの近くまで園路舗装で固められている。
- ・南側の斜面地はドウダンツツジの群落で覆われている。

###### ○腐朽菌

- ・枯死した桜の根株に強力な木材腐朽菌の子実体がでている。  
(土中の根系から苗木に感染する恐れがある)



枯損株のキノコ(腐朽菌)

##### イ 駒場体育館北側の雑木林の桜

###### (ア) 桜の問題

###### ○樹勢不良・枯死

- ・林内の桜を含む落葉性花木の衰弱と枯死が進行している。

###### ○病害虫の罹患

- ・窪地で衰弱した樹には木材腐朽菌が発生している。



北側雑木林・衰弱と枯死進行

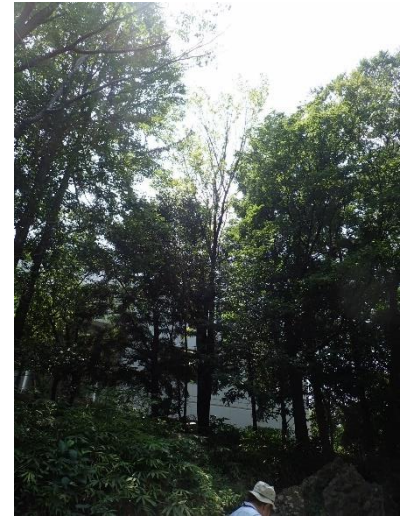
(イ) 日照の問題

○立地

- ・南側に建物があり、日照や通風条件が悪い斜面地である。

○種間競争

- ・多種類の常緑樹を含む雑木が年数を経て成長し樹冠を拡大したため、林内の照度が低下し桜の生育に適さない環境に変化した。



常緑樹に囲まれ日照不足

ウ テニスコート東側の広場の桜

(ア) 桜の問題

○樹勢不良

- ・成木の桜の枝先の葉が少なく衰弱傾向にある。若い苗木の成長も悪い。

○露出根の発生

- ・地表面に根が多数露出しており、通路部分では根の踏みつけによる傷も多い。

○樹皮の欠損、景観不良

- ・剪定後の大枝の傷口の巻き込み状態が悪い。
- ・樹形が回復しないため広場の景観を損なっている。

○病害虫の罹患

- ・ベッコウタケやコフキタケ等の強い腐朽菌被害を患っている木が多い。



広場・衰弱傾向

(イ) 土壌の問題

○踏圧

- ・日常的に根回りを人が往来し、地面が踏み固められて、表層が裸地になっている。
- ・土中の酸素と水分を求めて根が土壌の表層に集中するが踏圧で傷つき幹や根株の腐朽菌感染の原因になっている。

○狭い根域

- ・裸地化したため表層の土壌が大雨などで流出しやすくなり、太根が露出している。
- ・土壌は表層から約20cm深さまで「根が入り込むことが困難」な硬さ、20~60cmまで「根が伸長することが困難」な硬さで、桜の根が正常に伸長できない状態にある。



枝先の枯れ



根株の腐朽菌

## エ 南門外の八重桜(カンザン)並木

### (ア) 桜の問題

#### ○樹形不良

- ・カンザンは樹冠が上部広がりの高木品種で風圧を受けやすい自然樹形になる。
- ・樹幹は通路側に大きく傾斜伸長し、台風や降雪時に通路沿いを吹き抜ける風で大枝の折損や倒木が発生しやすい。

#### ○樹皮の欠損

- ・剪定後や強風時に折損した枝の傷口の巻き込み状態が悪い。

#### ○病虫害の罹患

- ・穿孔虫の被害を受けている恐れがある。
- ・腐朽菌による材の腐朽で大枝や幹折損のリスクを抱えているものもある。

### (イ) 土壌の問題

#### ○踏圧

- ・通路際に植栽されており、人の踏込みによる表層の裸地化と踏み固めによる根の伸長阻害が起きている。

#### ○狭い根域

- ・通路の反対側は低木類が密に植栽されており、桜の根系の発達領域と競合している。



八重桜並木・傾斜倒木発生



穿孔痕の残る倒伏根株

## オ 公園拡張部の桜

### (ア) 桜の問題

#### ○樹勢不良

- ・成木の桜の枝先の葉が少なく衰弱傾向にある。若い木の成長も悪い。

### (イ) 日照の問題

#### ○立地

- ・西日の直射を受ける場所で風通しも良く、乾燥が進みやすい環境にある。

### (ウ) 土壌の問題

#### ○踏圧

- ・日常的に根回りを人が往来し、地面が踏み固められて、表層が裸地になっている。

#### ○狭い根域

- ・土壌は表層からすぐに「根が入り込むことが困難」な硬さで、桜の根が正常に伸長できない状態にある。

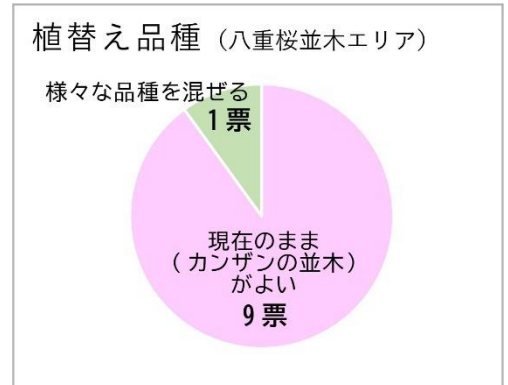


公園拡張部・衰弱傾向

(5) アンケートの調査結果

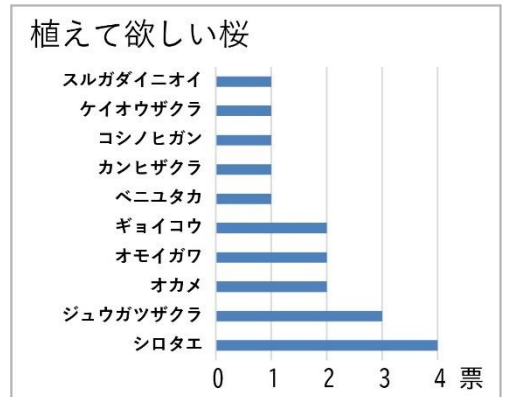
ア「既存部と拡張部を結ぶカンザン(八重桜)の桜並木の品種」

様々な八重の品種を混ぜたほうが良いという意見よりも現在のままカンザン1種類の並木が良い、という意見が大多数だった。



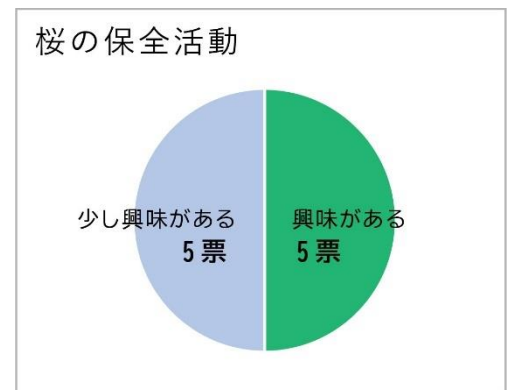
イ「将来駒場野公園に植えてほしい桜の品種」

大輪白色の八重の花を4月中旬に咲かせる「シロタエ」、薄紅の八重の花で春と秋の二季咲き性の「ジュウガツザクラ」の人気の高い。



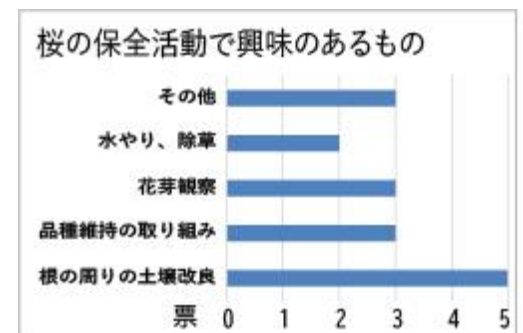
ウ「地域住民参加による桜の保全活動(桜守活動)への参加意思」

「興味がある」、「少し興味がある」という答えが半々で、「参加しない」という選択肢を選んだ人はいなかった。



エ「桜の保全活動(桜守活動)で興味のあるもの」

「根の周りの土壌改良(エアレーション、施肥、根元の保護等)」への関心が一番高いが「品種維持の取り組み(苗の育成)」「花芽観察(桜の健康状態の確認)」、落葉掃き等「その他」の活動にも広く興味があることが判った。



### 3 将来像の検討

#### (1) 前提条件の整理

##### ア 安全な歩行空間の確保

都市部において将来を見通して桜の育成を考えると、樹冠の形状は往々にして都市のインフラ設備の配置に規制されることを考慮する必要がある。

また高齢化が進む社会において、歩行者は杖や車椅子などの補助器具を使用していることを前提とし、植物と親しめる＝ゆっくりと移動できる余裕のある園路空間を確保する必要がある。

##### イ 健全な高木育成

樹木は目に見える地上部の枝葉だけでなく、通常意識することが少ない地下の根の生育具合もその健全性や将来性を大きく左右する。

樹木の育成を維持するのに十分な根の領域(8~10m)を確保しておくこと、さらに工事掘削などで根を傷つけると支持機能が欠損し以後強風時の傾斜や根返り倒伏のリスク、樹勢低下による病害罹患や景観不良のリスクをはらむことを考慮する必要がある。

#### (2) 植栽計画

駒場野公園は日ごろから地域住民の協力のもとに公園内の自然環境を維持するべく落ち葉の堆肥化や野草の育成保護などが進められている。現状の問題点を踏まえ、駒場野公園では可能な限り園内の発生材や植物資材、林内堆肥や自然土壌を活用して環境改善を行うことを検討した。

##### ア 植栽品種の選定

駒場野公園では新しい桜景観を創り出すのではなく、過去から現在まで続いてきた桜景観を健全に復活させることを基本方針とする。

ただし風が吹き抜ける建物に挟まれた空間や人の往来が激しい通路際だと大型の風害を受けやすい横広りの樹形の桜は、十分に根が張れず、人の接触で枝や幹、露出根が傷ついて病気や害虫を呼び込みやすい。その場合は現状の桜に似た花の色や形状、開花期をもつ小型の品種で、病虫害に強いものを選び、既存樹が倒木や危険木診断で撤去後、順に品種を切り替えていく方針を取る。例) ④八重桜並木エリア カンザン→コウカ

またアンケートの結果から将来駒場野公園に植えてほしい桜の品種として得票の多かった「シロタエ」を新たに植栽することも検討する。

(参考)現在、駒場野公園で植栽されているサクラ一覧

提供:公益財団法人 日本花の会

 エドヒガン	 コシノヒガン	 コヒガン	 シダレザクラ (拡張部)	 マメザクラ (拡張部)	 ヤエベニヒガン (開園当初植栽)
 ヒナギクザクラ	 オオシマザクラ	 オオヤマザクラ	 ソメイヨシノ	 イチヨウ	 ウコン
 ウワミズザクラ	 エドヒガンヤエ	 ヤエベニオオシマ	 ヤエベニシダレ	 ヤマザクラ	 イヌザクラ
 カスミザクラ	 カンザン	 ケンロクエンキザクラ	 スルガダイニオイ	 ジュウガツザクラ	 フユザクラ (開園当初植栽)

開花時期  ソメイヨシノより先  ソメイヨシノと同時期  ソメイヨシノより後  2期咲 (4月・秋)

・今後、新たに駒場野公園で植栽する予定の品種



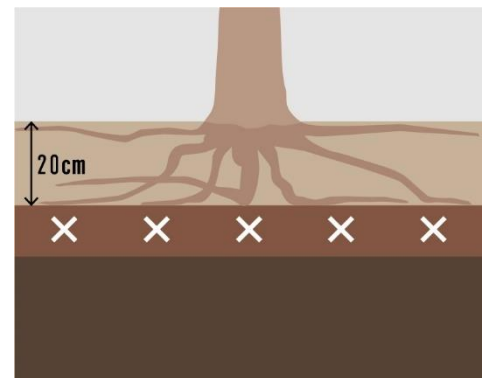
## イ 植栽基盤の改善

### (ア) 植替え

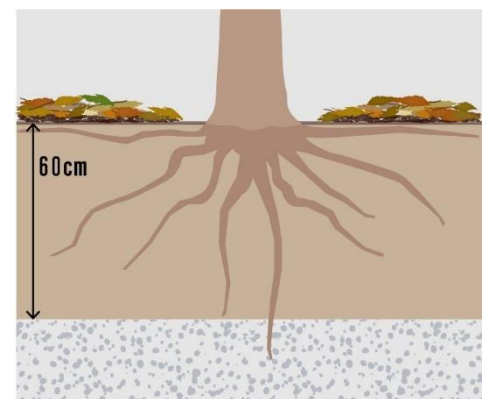
- ベッコウタケやコフキタケ、ナラタケモドキなど強力な腐朽菌で枯死したことが判っている既存樹の周辺や腐朽している切り株が残っている場所では、土壌中に病原菌が残るため、新たに植え付ける苗木も罹患する可能性が高い。植え替える場合は、地中に残っている根はすべて掘り取ったうえで深さ1m程度まで耕耘し殺菌処理を行う。

### (イ) 既存の桜

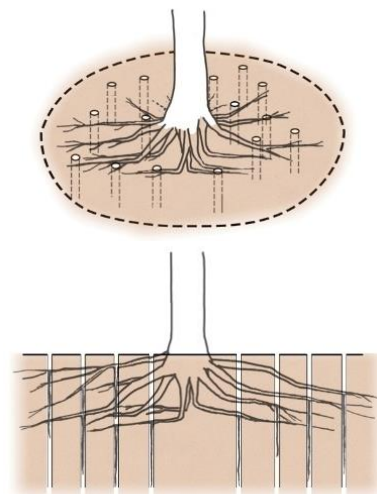
- 桜の周囲の土壌は、樹冠投影線内の根系範囲に園内につくった完熟堆肥を、年数をかけながら少しずつ壺掘りで施用し、保水性と保肥性、透水性を向上させる。
- 表層が固い場所では、土をほぐして細根をふやす必要がある。エアコンプレッサーや鋼棒を使って深い層まで細い穴をあけ空気と水と緩効性肥料を入れるエアレーションを行う。また、落葉期には幹から50cm程度距離をあけた状態で落ち葉を寄せ集め、保水と自然分解による土壌の膨潤化を図る。
- 豪雨や強風で表層土壌が流れて根が露出している場所では、地下に水や空気が通りやすいように根の周囲の土壌をほぐし、良質客土をもとの地表面の高さまで被せて復元させる。



現状の植栽基盤(イメージ)



土壌改良後の植栽基盤(イメージ)



エアレーションによる植栽基盤の透水性・通気性改良 (イメージ)

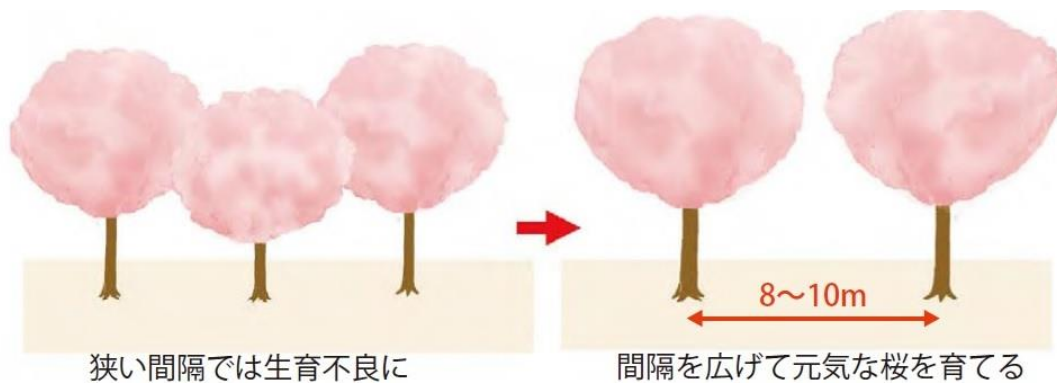


## ウ 植栽間隔の確保

### (ア) 桜の健全育成と公園利用の両立

- ・日照が不足する常緑高木の樹冠下など桜の健全生育が望めない環境に注意して植替えを行う。
- ・車椅子の通行や人の利用を考慮し、植栽帯を配置する。
- ・園内灯や電線類へ配慮する。

### (イ) 桜の根の生育領域の確保



- ・簡易土舗装内に直接植え付けている場所や人通りが多い動線沿いでは、根が十分に張れるよう植栽帯の拡幅や根回りへの侵入防止の保護柵配置を検討する。桜同士は8m以上の間隔をとり、根回りの踏込み防止には大型縁石（歩車道境界ブロック、擬木杭縁石）や可動式の柵を配置して通路と植栽の根元保護を両立させる。
- ・桜の健全生育を優先するため植栽帯内には桜と根系競合するその他の高中木は配置せず、高木同士の間や縁には常緑地被類や低木を密植にならないよう配植する。なお、病虫害の呼び込み阻止と桜の点検のため、根張りがよく見えるよう配植する。

### (ウ) 桜の樹勢回復

- ・桜と競合する根回り 50cm 以内の低木、8m 以内の中高木は可能な限り移植する。
- ・根株腐朽など強風時の根返り倒木のリスクを抱えた状態の桜は年数をかけて徐々に樹高低減を行い、重心を下げる。また、下枝やヒコバエに十分な日照と雨が当たるよう環境を改善する。
- ・西日が長時間当たる場所、舗装の輻射熱が激しい場所では樹勢回復までの期間、初夏から秋まで幹巻や樹冠への遮光布設置と灌水設備の導入を検討する。
- ・植栽箇所の周囲 3-4m 範囲にコンクリート基礎を必要としない杭ロープ柵や可動式の柵を設置して人の踏込みを予防する。

### (3) 将来像

現在植栽されている桜を適切に維持管理していき、倒木などの危険が生じた桜については順次植替えを進めていく。また、下図のように公園を5つのエリアに分けそれぞれのエリアの桜の印象は今後なるべく変えず、枯損衰退した桜をいかに復活させるかを焦点に駒場野公園の桜の将来像を検討した。



①コヒガン・ソメイヨシノ並木エリア

- ・公園のエントランスとして思い出の桜並木（コヒガン、ソメイヨシノ）を復活させる。
- ・コフキタケなど強力な木材腐朽菌の被害が拡大しているため、枯損木の根株は掘り取り撤去する。
- ・土壌水分保持と根の健全育成のため、正門通路は管理用車両の幅を確保した上で植栽帯を広げ、現状土の消毒や園内につくった落ち葉堆肥を活用した土壌改良を行う。
- ・車道と植栽帯の境には擬木縁石を立てて踏込み防止とし、周辺の低木を含め可能な限り保全する。



将来像



コヒガン  
(一重咲・小輪・淡紅)



ソメイヨシノ  
(一重咲・中輪・淡紅)

②広場(低木～亜高木)エリア

- ・二季咲きのジュウガツザクラを復活させ、秋にも桜を楽しめるようにする。
- ・目線の高さで桜を楽しめるよう小型の桜品種をまとめた空間を広場の一角につくる（ジュウガツザクラ、オカメ、ヒナギクザクラ等）。
- ・桜の健全育成と公園の利用に配慮して、根回りは柵での保護を検討する。

小型品種を広場の一角に集め、  
生育環境を改善維持



ジュウガツザクラ  
(八重咲・中輪・淡紅)

(亜高木の例)



オカメ  
(一重咲・小輪・紫紅)

(低木の例)

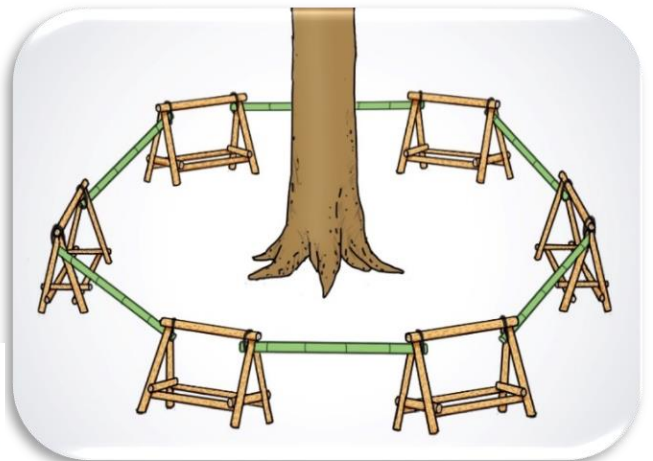


ヒナギクザクラ  
(菊咲(段咲)・小輪・淡紅)

(低木の例)

### ③広場(高木)エリア

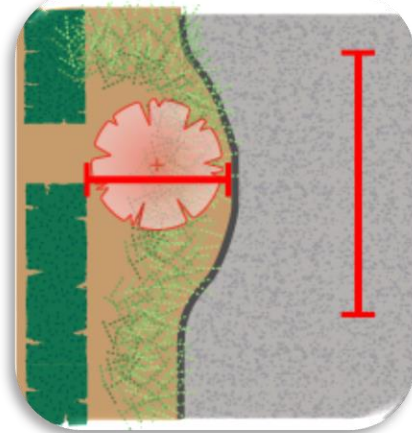
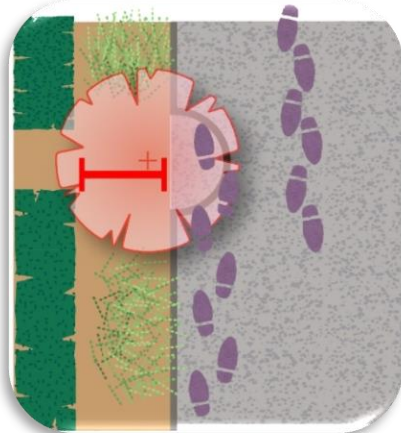
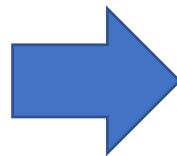
- 人の利用と高木の桜の保護を両立させるため、可動式の侵入防止柵の配置を検討する。
- 土壌の流出で根が露出している場所では、根が窒息しないようエアレーションなどを行ったうえで土壌を被せる。
- 強風時に幹折れや倒木が懸念される高木(例:エドヒガンヤエ)は樹勢を見ながら少しずつ樹高を下げる樹高低減剪定での維持を検討する。



根の保護範囲に可動式の侵入防止柵を配置

### ④八重桜並木エリア

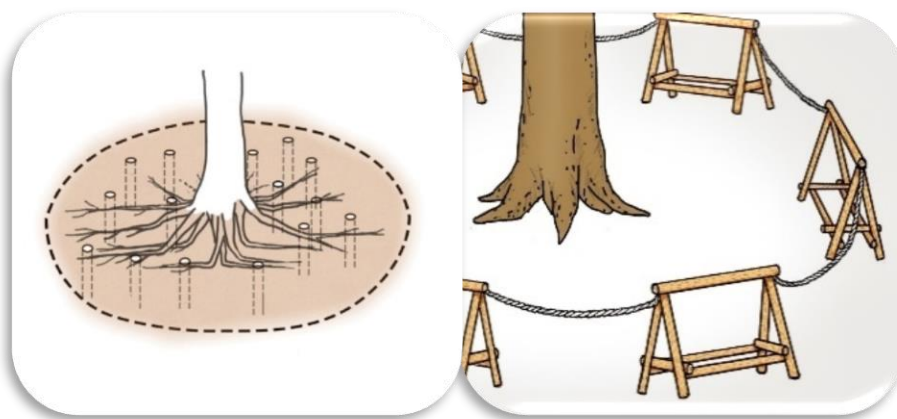
- 花は現状の「カンザン」に似ていて小型樹形であり風圧をうけにくく、かつ病気に強い品種「コウカ」に順次植替えを行い八重桜並木の景観を維持する。
- 根張りが健全に育つよう根元周囲の植栽帯を広げ、人が踏み込まないよう縁石の設置や地被類の植栽を検討する。



小型の八重桜に植え替える際、根の保護範囲の植栽帯を広げ侵入防止縁石の設置を検討

⑤駒場野公園拡張部

- ・踏圧による土壌の固結と根の生育不良を改善するため、根回り周囲に土を柔らかくする土壌改良（エアレーション等）や根の発育を促す施肥を行い、③広場（高木）エリアと同様、侵入防止の可動式柵や囲いを設置する。



土壌が硬く、空気と水分を求めて地表に浮き上がる「走り根」の周囲には、エアレーションを行って地下へ生育を誘導し、踏みつけ予防のため保護柵を設置する。

#### 4 維持管理計画

##### (1) 既存樹の基本的な維持管理

- ・樹勢を衰退させない剪定、腐朽予防対策
- ・枯枝、支障枝の早期切り戻し
- ・エアレーションと土壌改良（根を傷つけないよう注意）
- ・冬季、夏季の乾燥期の灌水
- ・発生している病害（腐朽、樹皮欠損、樹幹の揺れ・傾斜）の定期確認
- ・新たな虫害や病害の兆候確認

##### (2) 新植樹の基本的な維持管理

- ・強風時の枝折れや支障枝の迅速な切り戻しと腐朽予防対策
- ・成長後の大きさをコントロールするための整枝剪定
- ・定期的な点検、早期の異常発見と対処
- ・冬季夏季の異常乾燥時にこまめな人為灌水
- ・根張りが確保されるまでの支柱の更新と不要時の即時撤去
- ・春から秋、根回り 50cm 保護域の除草（穿孔害虫予防、異常の早期発見）

##### (3) その他周辺植栽の維持管理

公園全体の美観向上に貢献する低木地被類の植栽にも、適切な維持管理を継続して行うことで、植栽帯の土壌圏を共有する桜の健康増進を支える効果がある。

###### ア 灌水、施肥、除草、剪定

低木地被は、乾燥期に水切れによる葉の萎れが出るタイミングが早い。葉色の異常や枝の伸長量の変化、花芽の付き具合で肥料の過不足がわかりやすい。桜と水分や養分を競合しないよう適切な剪定や灌水、施肥、除草が必要である。

###### イ 増えすぎた株の掘り取りと裸地部への移植

根回りへの踏込みを予防するため植栽帯は草花で「地を覆う」ように管理をする。また地被類は株が密植し始めると衰退するため、2～3年に一度は株分け更新を行い、踏込みで裸地化した場所へ移植することで地表面の土壌をほぐし、地中への雨水の浸透効果も回復することができる。

##### (4) 病虫害等の被害

###### ア 穿孔虫による幹の被害

例) クビアカツヤカミキリ(甲虫)、コスカシバ(蛾)

飛翔昆虫である親(成虫)が樹皮に傷をつけて産卵し、孵化したイモムシ状の幼虫が樹の内部の生きた材を食べて育つ。幼虫の食害以外にも産卵時の樹皮の傷口や幼虫が材内部で掘る坑道、内部で蛹から成虫になって出ていくときの脱出孔を通じて木材腐朽菌が桜の内部組織に広がり、落枝や幹折れ、枯死を引き起こす危険がある。

## イ 枝の被害

例) サクラの増生病（こぶ病）、てんぐ巢病

枝の傷口にバクテリアや病原菌が入り、枝の途中に点々と握りこぶし状の塊が発生したり、細い枝が大量に出る病気。この症状が出た枝の先では桜の花は咲かず、葉は枯れる。放置すると樹冠全体に症状が広がって樹勢が衰退する。

## ウ 土壌中の菌類による幹や根株の被害

例) ナラタケ、ナラタケモドキ、ベッコウタケ、コフキタケ

土壌中の病原菌が樹木の根や地際の幹にできた傷口から侵入し樹皮の下に広がり樹木の養分を奪い、内部の材を腐朽する。梅雨時や秋の長雨に、子実体であるキノコが発生して初めてわかることが多い。罹患した樹木は樹勢が衰退し、枯死、根返り倒木や幹折れ、大枝落下などのリスクを負う。

### (5) 協働作業の考え方と役割分担

#### ア 日常的な点検、観察作業

見守り対象として日常的に公園の桜を観察し、「この木の周りだけ妙に葉が萎れている」「幹から木くずが出ている」などのささやかな気づきを記録する。これにより、病害虫トラブルの早期発見につながり、施肥や灌水、害虫駆除などを適切な時期や必要な場所から行うことができる。

#### イ 土壌改良と根回り保護

植物の樹勢回復には、固結した土壌をこまめにほぐすことが重要である。表層土のエアレーションや落ち葉堆肥を施す土壌改良を行い、園内発生材を組み合わせた侵入防止柵や縁を作成、設置することで桜の寿命を延ばすことができる。

#### ウ 維持管理作業

桜は樹木のため、働きかけの反応に時間がかかる。しかし、植物の維持管理作業（清掃や灌水、施肥）の一環を生活の楽しみのサイクルに取り入れるとより良い維持管理に繋がり、駒場野公園の景観を向上させることができる。

#### エ 次世代の苗木の作成

桜の保護活動の一環として、接ぎ木や挿し芽、種子の取り撒きをし、現在ある桜の次世代を残すことは、地域の財産として、地域に愛される桜の風景を後世へ伝えることにつながる。また、より多くの人々に桜への関心、親しみを持ってもらうことができる。

#### オ 駒場野公園桜のPR活動

園内の桜のPR活動として、桜の観察会や維持管理作業の講習会の開催、桜の品種や生育記録の情報の発信などを行うことにより、世代を超えた桜守同志を増やすことにつながる。